



SENSHOJI
YUKARI NEWSLETTER
1994-2024

ゆかり通信
VOL. 313
令和 6年 2月

北海道千歳市清水町1-14 鶴竈山 千正寺
TEL: 0123-23-2442 FAX: 0123-24-9883
ホームページ <http://sensho-ji.net/> フェイスブック @Senshoji

2024年千正寺カレンダー 2月の言葉



人に会う時は、春のように温かい心で。
仕事を考える時は、夏のように情熱的な心で。
物事を考える時は、秋のように澄んだ心で。
自分と向きあふ時は、冬のように厳しい心で。

今月の言葉は『四季のことば』です。作者は諸説あってわかりませんでしたが、様々な書籍でよく紹介されていて、学校のモニュメントなどで広く使用されています。四季を味わう日本に住む私たちにとってとても共感してしまう詩ですね。

「人に接する時は、春のような温かい心」。春のように温かい心とは、他人に対する思いやり、やさしい心です。

「仕事をする時は、夏のような燃える心」。仕事や勉強やスポーツに向かう際は、情熱をもって行う。

「物を考える時は、秋のような澄んだ心」。物を考えるときは落ち着き、澄んだ心で物事を考えることが重要です。

そして「己を責める時は、冬のような厳しい心」とは一番大切な心構えです。自分のしたことを冬の寒さのように厳しく見つめなおし、振り返ることが大切です。

「慚愧（ざんき）」という言葉があります。辞書によりますと「慚」とは自分自身と法（仏教の教え）に照らして自分がなした過ちを恥じる。「愧」とは世間に照らして自分がなした過ちを恥じると共に、悪行から離れること。とあります。この恥ずかしいと思う気持ちは、とても大事なことです。

人は恥ずかしいと思う気持ちをもつからこそ、自分をかえりみたり、見つめ直すことができるのではないのでしょうか。ところで、親鸞聖人は正像末和讃に、『無慚無愧のこの身にてまことのころはなけれども 弥陀の回向の御名なれば 功德は十方にみちたまふ』とお示くださっています。

これは「どんなに慚愧してもきれいな私が私である」という厳しいお言葉です。いくら慚愧する、罪を恥じるといっても、どうしても自分を正当化して、なかなか自己中心的な思いから抜け出すことはできません。つい、心のどこかで「仕方がない」と思う自分がでてしまいます。

私自身を振り返っても、私はあまり自己肯定感が強い人間ではなく、ついつい「自分なんてたいしたことない」と思いがちな人間なのですが、最後はやはり「仕方がない」というところに落ち着いてしまいます。

しかし親鸞聖人は、自分勝手にわが身を振り返り慚愧するのではなく、常に阿弥陀さまのおこころを鏡とし、自分のことを正当化していないだろうかと思うその姿が、すでにお念仏申す人生を歩んでいるということであり、阿弥陀さまのおはたらきの中にあるとおっしゃってくださっています。

(文：行武秀明法務員)